



当院小児科の体制充実

出産は、小児科医のバックアップがあつてはじめて安全・安心なものとなります。低体重、呼吸異常、低血糖などの異常があつた場合はもちろん、退院する赤ちゃんは全員必ず小児科のプロの目でチェックしてもらっています。4月から、当院の小児科に新生児が専門の金子孝之医師が加わり、充実の5名体制になりました。

その金子医師にNICU について、またお母さん方からのご質問の多い予防注射について大久保医師に解説していただきました。

予防注射のお話 小児科・大久保総一郎

赤ちゃんが生まれて2ヶ月目になると、予防注射を受けることができるようになります。現在我が国で受けることのできる予防注射のうち、小児期に関係のあるものについてお知らせします。副反応に関するご心配もあろうかと思いますが、実際に病気に感染すると重症化し、時には生命に関わることもあります。ワクチンの順番や間隔などをかかりつけの小児科医に相談されながら、予防注射を受けていくことをお勧めします。ウイルスや細菌の病原性を弱めて用いる生ワクチンと、活力を失わせたウイルスや細菌の成分の一部を用いる不活化ワクチンがあります。また予防接種法で定められている定期接種(基本的に無料)と、それ以外の任意接種(有料だが市町村で補助するものがある)に分けられます。短期間にいくつもの予防注射が予定されているため、複数のワクチンを同時に接種する方法もあります。

定期接種ワクチン

- 1) BCG: 結核の予防注射、はんに注射で接種します。生後3か月から6か月になる前の間に受けます。
- 2) 三種混合ワクチン(ジフテリア、百日咳、破傷風): 生後3か月から始めます。1期初回として計3回(3~8週間隔)、1期追加として初回終了後12~18か月の間にもう1回(4回目)受けます。
- 3) 二種混合(ジフテリア、破傷風)ワクチン: 三種混合ワクチンの2期として11歳で1回受けます。
- 4) ポリオワクチン: 集団接種で行われており飲むタイプのワクチンです。生後3か月から受け始めます。6週間以上の間隔をおいて2回接種します。
- 5) 麻疹・風疹(MR)ワクチン: 2回接種します。1期は1歳になったら早めに受け、2期は小学校入学前の1年間に受けます。
- 6) 日本脳炎ワクチン: 標準的には1期として3歳から5歳になるまでに計3回、2期として9歳で1回受けます。

任意接種ワクチン

- 1) b 型インフルエンザ菌(Hib)ワクチン: 生後2か月から受けられます。開始する月齢によって接種回数が異なります。
- 2) 肺炎球菌ワクチン: 生後2か月から受けられます。開始する月齢によって接種回数が異なります。
- 3) おたふく風邪ワクチン: 麻疹・風疹ワクチンの後に1回接種します。集団生活に入る前に受けることをお勧めします。
- 4) 水痘(みずぼうそう)ワクチン: 麻疹・風疹ワクチンの後に1回接種します。集団生活に入る前に受けることをお勧めします。
- 5) 季節性インフルエンザワクチン: 年齢によって回数や使用する量が異なります。幼少児ではワクチンの効果が不十分なことがあるため、家族が予防注射を受けて家庭にインフルエンザを持ち込まないようにすることも考えましょう。



保育器の赤ちゃんを見守る小児科医師軍団

NICUのお話 小児科・金子孝之

“NICU”という言葉聞いた事がありますか？

Neonatal Intensive Care Unit の頭文字をとって NICU、日本語では新生児集中治療室といいます。ICU(集中治療室)というとなんか恐ろしい響きですね。一般にはあまり知られていない、新生児医療について、新生児科医の立場から解説します。

お腹の中にいる赤ちゃんは呼吸、栄養補給、体温管理など生活の全てをお母さんに守られています。酸素、栄養は胎盤、へその緒を通じてお母さんから貰います。子宮の中はほぼ一定の温度に保たれ、無菌状態の環境です。一方、生まれた後は、自分で肺呼吸をして、体温を保って、母乳を飲んで栄養補給をし、細菌などの病原体から自分を守らなければいけません。“お腹の中の守られた生活”から“自分で生きていかなければならない生活”に大きく変化します。生まれるときほどの劇的な変化は人間の人生で他にはありません。幸いほとんどの赤ちゃんはその“変化”に上手に対応していきます。中にはその劇的な変化に耐えられず、手助けを必要とする赤ちゃんもいます。そんな赤ちゃんの手助けをしているのが NICU です。NICU では早く生まれた赤ちゃん(早産児)、小さく生まれた赤ちゃん(低出生体重児)、心臓や脳など様々な病気を持って生まれた赤ちゃんをお世話し、治療しています。呼吸が上手に出来ない赤ちゃんは人工呼吸で手助けをし、体温が保てない赤ちゃんは保育器の中で温めて、口から上手に飲めない赤ちゃんは点滴をしたり、管を使って栄養補給をしたりします。NICU では病気の治療だけでなく、赤ちゃんの成長も手助けしています。

約30年前の日本では低出生体重児出生率は約5%、新生児死亡率は1000出生で5人程度でした。わずか30年間で低出生体重児出生率は約9%と増加し、新生児死亡率は1000出生で1人程度にまで減少しました。つまり小さく生まれる赤ちゃんの割合がおおよそ2倍に増えたにも関わらず、亡くなる赤ちゃんの割合は大きく減りました。この30年間で日本の新生児医療は大きな発展を遂げて、いまや新生児死亡率の低さは世界トップレベルです。

ある一定の頻度で手助けが必要な赤ちゃんは生まれ、NICU への入院が必要になります。もちろん NICU に入院する必要がない元気な赤ちゃんが生まれることが一番なのですが、万が一 NICU に入院が必要になったとしても、日本には世界トップクラスの新生児医療に支えられた NICU があります。

以上、小さな命を守る NICU という場所のお話でした。